
ホリデー＃日なたを浴びて

バームクーヘン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホリデー#日なたを浴びて

【Nコード】

N4084V

【作者名】

バームクーヘン

【あらすじ】

ある日の、紅渡とレミリア・スカーレットの話。
苦手な人は注意。

(前書き)

例によって東方とライダーのクロスなので、苦手な方は戻ることを推奨します。

「・・・確かに、この辺で声が聞こえたんだけどなあ」

紅渡は自身の茶髪を掻いて、怪訝な顔をする。

自分の部屋でバイオリンを弾いている途中、何か変な声が聞こえたので辺りを見回りにしていたのだ。

今、渡が身を寄せている紅魔館は気軽にやって来れる場所でもないし、第一誰かが来れば門番の美鈴さんが気付くだろう。

渡はそう思い、さっきのは聞き間違いだと考えた。

「わーたーるうー」

「・・・え？」

渡が帰ろうとした瞬間、何処からか自分を呼ぶ声がした。

「たーすーけーてー」

また聞こえた。

そして、それは渡のよく聞く声だった。

「レミリアさん？」

それは紅魔館の当主、レミリア・スカーレットの声だった。

「ここよー」

「・・・何処ですかー？」

渡は辺りをキョロキョロと見回す。

その時渡は近くの茂みがガサガサと音を立てている事に気付いた。

近づいて茂みを除けてみる。

「・・・何してるんですか」

渡は地面を見下ろす形で立ち止まった。

そこには、首から下を地面に埋め込まれたレミリアがいた。

「フランにやられたの」

「またですか」

ここ最近のフランのレミリアいじりはエスカレートするばかりだ。

「何とかしてフランに一矢報わないとね」

「無理でしょう」

渡はレミリアの発言を一蹴した。

渡が知る限りレミリアがフランに勝った所を見たことがない。

「フランにだけは負けたくないのに！あーもう腹立つ！」

「落ち着いて下さい。今引き抜きますから」

渡は慎重にレミリアを引っこ抜く。

そして、汚れを手ではたいて落としていく。

「咲夜さんと呼んで服を変えて貰いましょう」

「ええ、そうしましょう」

渡がレミリアに手を差し延べる。

レミリアは黙ってその手を繋いだ。

手を通して二人の温もりが互いに伝わる。

レミリアは自分の頬が熱くなるのを感じていた。

「そ、それにしても太陽は相変わらず疎ましいわ」

レミリアは自分をごまかすかのように口を開いた。

「レミリアさんは、太陽が嫌いですか？」

「そりゃあそうよ。今だって魔皇力がなかったら私、死んでるもの」

レミリアはキバに変身した際に魔皇力が活性化し、ファンガイアに近い存在になった為、日光も平気になった・・・らしい。

吸血鬼がファンガイアになった例など存在するはずもなく、実際の所はよく分かってない。

「レミリアさんが嫌いなら構いませんけど・・・なのに、妙に嬉しそうですね」

「そりゃそうよ」

レミリアは渡の手をほどくと、渡の前でクルッと回転して渡と向き合う。

「だって、貴方の隣にいたためには仕方ないもの。太陽は嫌いだけど、それに見合うだけの価値は・・・いいえ、それ以上の価値があるわ」

「ありがとうございます」

渡はレミリアの頭を優しく撫でる。まるでぬいぐるみを撫でているかのような柔らかい感触だった。

「むー・・・渡、貴方、私を子供扱いしてない？」

「してませんよ」

渡は微笑んで答えた。

その顔を見て、レミリアの頬が緩んだ。

その時、ざばあ、と音を立てて、レミリアの頭にバケツ一杯程の量の水が降ってきた。

渡が顔を上げると、そこには窓から頭を出したフランがいた。

「今のお姉様、すごい美人だよ。水の滴るいい女とはこのことだね！」

フランはそこそこ見下した目でレミリアを笑い、早々と館に戻った。

「大丈夫ですか？」

「・・・もういや」

レミリアはいじけた。

全身ずぶ濡れで分らないが、心なしか泣いているのかもしれない。

「折角良いムードだったのに、全部目茶苦茶よ。あの子は本当にどうして・・・」

「首から下が埋まっていた時点でムードも何もあつたもんじゃないかと・・・ああ、泣かないで下さい。謝りますから」

気付けばレミリアの目がウルウルとしていた。

「貴方は本当に、女心を分かってないわね」

「面目ないです」

「・・・ねえ渡。貴方はあと何年此処にいてくれるの？」

「それは分かりませんね。数ヶ月か、数年か、数十年か・・・」

渡はレミリアに手を差し延べた。

レミリアは、その手をギュッと握り締めた。

「じゃあ、今は離さないでいきましょう。いつか遠い、未来まで」

「・・・出来る限り、近くにいますよ」

二人の視線がぶつかり、重なった。

互いを見つめるその目は儚くも、それでいて、穏やかで確かなものだった。

そして、再びレミリアの頭に水が被せられる。

いや、渡にも伝わった。

この熱気は熱湯だろう。

犯人は探さなくても分かる。

「そろそろ本気で怒らないとね」

「その前に着替えてくださいね」

二人は手を握ったまま、紅魔館の中へ戻っていく。

太陽は、そんな二人を熱い日差しで祝福する。

そして、紅魔館の扉はボタンと音を立てて閉められた。

(後書き)

性懲りもなく短編です。

この組み合わせは結構好きです。

次回の予定は当然考えてません！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084v/>

ホリデー#日なたを浴びて

2011年10月9日22時43分発行